
不協和音

千野葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不協和音

【NZコード】

N3688A

【作者名】

千野葉

【あらすじ】

私立姫野学園に通う君島祐斗は両親をある事情で亡くしている。それ以来彼は他人とは極力関わらない生活をさも当然のように続けていた。しかし、ある日学園の敷地内にある講堂前のベンチで彼は一人の少女に出会う。そこから彼の日常は劇的に変化することになるのだが・・・。

～0・プロローグ～（前書き）

それは一つの不思議な出逢い。そこから全てが始まり

。

～0・プロローグ～

悲愴。朝田覚めて一番最初に思い浮かんだ言葉がその一文字だった。
自室にはその中を照らす外からの陽射しと、それを遮る数枚の分厚い布　カーテンがある。
布団を剥ぐと少年は我が眼をこすりながら上下淡いブルーカラーのパジャマのまま洗面所へ向かう。

「」は、とある高層マンションの6階窓側から数えて3つ目の部屋。

自室のすぐ隣はリビングで高級そうなソファーやテーブルが所狭しと配置されている。

当然少年が買い揃えたのではなく、彼の両親が生前ポケットマネーで購入したものだった。

数分後、一見少年の幼さの残る顔立ちはシャワーから出るとその淡い瞳は鋭さを増していた。

少年はバスタオルで濡れた髪を一頻り拭つた後、少し長めの短髪をドライヤーで乾かし、

少年の性格を一層際立たせる濃いグレーの学ランと長ズボンを身につけ本格的に身支度を整える。

少年の通り高校はどんなにゆっくり歩いたとしても5～6分で着く、姫野学園と呼ばれる都内でも有名な名門校である。

比較的新しく外装が綺麗なのが本校舎。一見して誰もが古いという

印象を受けるであろう建物が別館の図書室。

そしてグラウンドを囲うようにして配置された二つの建物の他にもう一つ、ヨーロッパ調の教会のような建物があった。

今は使われていないが、この学園が設立された20年以上前は学園のOBのカップルらが結婚式を開いたりして賑わっていたらしい。

休み時間。授業が終わるや少年はその建物の傍らに配置された、やはりヨーロッパ調の芸術的なデザインの長椅子に座っていた。

普段からあまり出入りのない場所ということで正面のグラウンドに見える生徒らしき人影を除けば、周囲には人影一つ確認出来ない。

少年は無意識に瞼を閉じ、スゥ　と意識を沈めると全神経を聴覚に集めると周囲を覆い尽くすあらゆる物音を感じた。

大分距離があるはずのグラウンドで生徒達がワイワイやっている声から、近くで風が流れ、その影響で木の葉が落ちたであろう小さな音まで。

少年の集中力は他人のそれとは桁外れである。それと並ぶのも普段から心を落ち着け、自らの意識を保つにはそつする他なかったからだ。

少年の両親は両方とも少年が幼い頃に他界している。そのため親戚や俗世間からの気遣いや同情の視線を、少年は幼い頃から浴びていた。

周りはただそれをするだけで直接自分に関わるうとするものはいないし、酷いときは”可哀相な子”という哀れみの視線を遠慮なしに向けてきていた。

少年はいつしか自分が深い回想に浸っていたことに気づき、瞳を開くと苦笑混じりに改めて椅子に座り直した。

と、そこで普段は人気の少ないはずのこの場所に一つの気配を感じ、ふと視線を上げると、そこには何処か儂げな少女の姿があった。視線はしつかりとこちらを見つめており、しかし少し躊躇いとも取れる感情を浮かべながら時折少年から視線を外したりしている。

少年は長椅子の真ん中に座つていて、それに気づくと彼は無表情のまま席を詰めた。瞬間、少女の顔に驚きが広がる。

しかし、やがて小さく一礼すると少女は少年の隣に座り、やや俯いたまま両手を膝の上に乗せて暫し黙り込んだ。

別に無理に話す必要はないし、少年も足を組むと真正面を何処か遠い目で見つめながら暫しの時を過ぎた。

いつもなら他人の存在を察するや真つ先に嫌悪を露わにする少年。しかし、不思議と不快にはならず、ゆっくりとした時間は刻一刻と過ぎていく。

やがて、聞き慣れたチャイムが鳴り、少年が立つとそれを目で追うようにして少女がこちらを向いた。

その瞳は相変わらず悲愴さえ思わせる。彼女に何があつたのかは知らないが、少なからず少年は少女に自分と同じ匂いを感じた。だから近くにいても不快じゃないし、拒否反応も出なかつたのだと少年は理解する。小さく笑みを零す少年。それにきょとんとする少女。

しかし、彼女も目の前の少年に自分と同じ何かを感じてかやがてクスッと理由のわからない笑みを零した。

とても、不思議なことである。互いに初対面のはずなのに全然そん

な感じがしない。

むしろ以前何処かで会っていたのだからとかとさえ感じてしまう、とてもとても不思議な巡り合い。

それが、ちょうど一ヶ月ほど前の出来事である。

（1）・徒然なるままに（前書き）

一人の出逢いは一体何を意味するのか。そして、ある日突然日常に満ちる旋律が乱れ、不吉な不協和音を奏で始めた。

～1・徒然なるまま～

時は流れ、同年10月中旬の月曜日。少年はいつも通り適当に授業に出ると休み時間に学内の古びた教会に足を運んだ。相変わらず人気のないこの場所は、季節の関係もあってより一層独特な雰囲気を湛えるよつになっていた。

周囲を彩るオレンジ色の紅葉と、その木々の梢をあおる小さな風の音色。その一つ一つが少年の心にじんわりと染み渡る。少年は相変わらずその瞳に鋭さを宿したままベンチに座ると、そつと瞳を閉じ意識的に深く意識を沈ませていった。

安らぎ。暫くして浮かんだ言葉がそれだった。風が少年の少し長めの前髪を揺らし、その感触が少年に伝わる。本当に小さなことではあるが、少年はそれすら溶け込む空氣の中の一つの愉しみと感じていた。

しかし、やがてそれを遮るように声を掛けてくる人物が現れた。

「祐斗さん」

聞き慣れた少女独特のソプラノ。瞳を開くとそこには今や見慣れた一人の少女の姿がある。

髪は腰まである長髪で前髪を眉毛の数センチ下で切り揃え、男子の淡いグレーの学ランとは違い、女子独特の薄いグレーのセーラーを身につけている。姫野学園指定の女子制服である。

「また、ここにいらっしゃんですね」

祐斗、と呼ばれた少年は顔を上げると驚きもせずにベンチに預め空けておいたスペースを示した。

「……座るか？」

「はい。」

少年　君島祐斗の言葉に促されるままに少女は彼の傍らに腰をおろす。

祐斗は普段学内では誰ともつるまない所謂”一匹狼”だが、彼女は別だった。

というのも、あの不思議な出逢いからほぼ毎日のように顔を合わせ、最初は一言二言交すだけだったが、彼女の何処か遠慮がちな人柄に触れて、時々見せる儂げな顔を見ていくうちにその存在に興味が湧くようになった。彼女の方も、彼を煙たがることもなく自分から姿を現し、彼の姿を確認するやその存在を安易に受け入れている。

「祐斗さんは休み時間はいつもここにいるんですね」

ベンチに座るや、少女はおもむろに口を開いた。

それを無視する理由はないから、祐斗はそれに応える。

「ああ……けど、それを言つなら結衣だって休み時間に限らずよくここにいるだろ。それと同じじや」

祐斗は休み時間・昼休み・放課後と事あるごとにこちらの様子を観察していた。

そして、その度必ずそこには彼女の姿があるか、後から姿を現すのである。

「……はい。この講堂、学内の中で一番好きな場所なんです」

結衣、と呼ばれた少女は祐斗の切り替えしに少し驚きながらもやがてクスリと微笑んだ。

神崎結衣 それが彼女の名前である。

初対面こそ一言も交わさなかつたが、日を重ねるごとに祐斗は互いに名前を知らないことが不自然に思え、ある日思い切つて彼女に言つてみた。

『 君島祐斗。』

『えつ？』

案の定、何の脈絡もなく祐斗に名乗られた少女は驚いて顔をこぢらへ向けた。

それをフォローするように祐斗が再び言葉を付け足す。

『それが俺の名前だ。俺達、何度も顔合わせているのに互いに名前を知らないだろ？ そろそろ名乗つてもいいと思つてな』

『あつ、そうですね』

祐斗がそう言つや、少女は気づいたように声を上げた。
そして、小さく微笑むとおもむろに祐斗の前へ立つ。

『失礼致しました。私は姫野学園高等部一年、神崎結衣です。宜しくお願い致します』

言つや深々と頭を下げる少女 結衣。物腰の柔らかい印象を受け、
それは思いのほか心地良くな祐斗の視界に映つた。

『宜しくな、神崎』

祐斗は言葉少なにそれとだけ言つ。今は初対面から一週間以上も経つており、高等部一年といふことは祐斗とタメである。
呼び捨ては少々心苦しいが祐斗は彼女に關して”さん付け”ではあまりにも他人行儀に思える。故に苗字の呼び捨てで。

『結衣で結構ですよ。君島わん』

結衣は首を横に振るとこりと微笑み心なしか嬉しそうに言つた。
そこまで言われては祐斗としても後には引けない。照れ隠しに鼻の頭を搔くと祐斗は再び口を開いた。

『なら、俺のことも祐斗でいい。まあ、呼び捨てるかどうかは、そつちに任せせる』

『え、よろしいんですか？ えっと、それでは……。』

少し間を置くと、結衣は意を決して言つた。

『改めて、宜しくお願ひします……祐斗さん』

『……ああ、こちらこそ宜しく。結衣』

あれから既に二週間。今では教会前は一人の特等席になっていた。

と言つても特にすることではなく、時たま結衣が小説を読んでいたり、祐斗が両手を制服のポケットに突つ込みながら周囲を意味もなく見回したりして短い休み時間は終了する。

それがいつものパターン。

「物好きなんだな。今に始まつたことじやないけど」

祐斗は若干冷めた口調で言つた。対する結衣は少しだけ意外そうな瞳を祐斗に向ける。

「そつ……ですか？　でも、それならどうしてあなたもここにいるんです？」

……その理由は、ここが好きだからではないんですか？

「ん……まあ、な」

祐斗はお茶を濁すように視線をそらすと短く呟いた。

実際この場所は好きだ。人気が少ないし静かだし、何より落ち着けるから。

結衣は先ほどの意外そうな表情を消すとフワリと微笑み、軽くパチンと両の手を合わせた。

「あつ、それならあなたも私と同じ”物好き”といふことですね」

確かに人気のないことを好きだと言つてゐるのは結衣だけではない。祐斗の言葉を振り返ると

彼もその”物好き”とやらに入るには至極自然ではあるが、そこまで嬉しそうに言つことでもあるまい。

しかし、祐斗は結衣の言葉を否定するのが面倒といつ理由から、それ以上は突つ込まなかつた。

「ま、まあ……そつだな」

そう言つや視線を宙に戻し、ふと通り抜ける風を受ける。その影響で結衣の長髪が揺れた。

心地良い秋のそよ風は秋の薫りと共に何処か甘い香りを祐斗のもとへ運んでいった。

他愛のない会話。しかし、そこには確實に大切な何かが含まれている。

かつて、祐斗は家庭の事情で波乱に満ちた日々を送つてきいていた。両親の死去で集まつた周囲の視線。周囲の何気ない会話に溢れ出す嫌悪。

やがてそれは祐斗を極度の人間嫌いへと変えていく。

しかし、あの日 結衣と出逢つて以来祐斗は変わつた。自分でもわかるほど表情は柔らかく、周囲の同級生とも少しづつだが話をするようになった。

とは言つてもそれこそ初対面の頃の結衣との会話のよつて言ひ交す程度だが以前と比べれば、格段の進歩と言えるだらう。

「？ どうかしました……？」

『氣づく』と結衣は小首を傾げ、不思議そつに祐斗を見つめていた。

「いや、別に。」

「そうですか？」

「ああ」

人間変われば変わるものだな、と思つていたことを結衣まで伝えることもないだらう。

祐斗は適当に言葉を濁した。と、次の瞬間聞き慣れたチャイムの音色が聞こえてくる。

「あ、もう時間。」

「うういな。……ひと、そろそろ教室に戻るか」

「そうですね」

祐斗が立ち上がるとそれに続ぐみづて結衣がベンチから腰を浮かせる。と、やがて『氣づいたよ』と声を上げた。

「あ……祐斗さん。」

「え？」

呼び止められた祐斗はきょとんとして結衣を見つめた。

「今日の放課後、少しお時間ありますか？」

「？ ああ、なくもないけど……何だ」

「よかつた。私、寄るところがあるんですけど、もし宣しければ一緒に付き合つてもらえませんか？」

そのあまりにも唐突な申し出に祐斗は暫し硬直した。大体自分が一緒に行く必要が何処にあるのか？

しかし、そんな祐斗を不思議に思ったのか結衣は小首を傾げ、徐々に不安げな表情になっていく。

「……あの、祐斗さん？ ダメ、でしょうか

結衣にそんな顔を見せられては人としてその申し出を断る訳にはいかない。

「ん~……いいよ、別に。どうせ暇だし」

祐斗は少し考える素振りをすると快くそれを承諾した。

「本当ですか？……ふふ、よかつた」

目に見えて安心する結衣。ここまで反応が素直だと見てている側としても気持ちが良い。

やがて、結衣は両手を前に持つてくると祐斗に向かって丁寧に一礼

をした。

「それでは、私もこれで失礼しますね」

「ああ。それじゃ放課後にな」

「はい、校門の前でお待ちします」

「うー、了解」

言つや、結衣は今一度嬉しそうに微笑みそのまま身を翻すとその場を去つていった。

放課後。校内では部活動をする生徒達で賑わい、それ以外の生徒は次々と校舎を後にしていく。

流れしていく景色。見慣れた街並。祐斗は隣に人の気配を感じながら学生鞄を背にして歩いていた。

「どうした？」

結衣は先程一言二言交しただけでそれ以降自分から率先して何かを話そうとはしない。

それを不思議に思い、祐斗は結衣に訊いてみた。

「えっ？ な、何がですか」

「いや。さつきからおまえ、落ち着きないみたいだから

祐斗がやつらに、「結衣は「あつ…」と何かに気づいたような声を上げた。

「……すみません。その、いつこのうの、初めてなもので」

「いつこのうの?」

「はい。…………いつして、誰かと一緒に並んで歩くこと

別に居心地が悪い訳ではないが、今まで結衣はいつして友人と下校をすることがなかつたらしく、その緊張というものがあつたのかかもしれない。尤、祐斗からすればちょっとしたことかもしれないが。

「へえ。結構結衣って、付き合ひ悪いんだな」

祐斗はからかうよつて言つた。それは自分だつて一匹狼といつ立場上あまり友達といつものを作つたりはしないが、それでも昔の自分と比べれば、祐斗は少しづつそれらしき存在を築き上げつつある。その余裕からの発言である。

「そ、そんな」と……ないはずですけど

「あ。嘘ウソ、冗談だつて。」

自分の冗談に耳に見えて落胆する結衣を見て焦つた祐斗は慌てて付け加えた。

結衣はとこつと途端拗ねるよつて口を尖らせ、俯き加減のまま呟くように言つ。

「……そんな冗談、私笑えませんよ」

尤、結衣でなくともそうだらう。祐斗は空いている方の手で鼻の頭を搔くと小さく苦笑を漏らした。

「悪い。……でも、俺もあまり友達とは一緒に帰つたりしなかつたような気がするな」

真横の結衣から視線を外し、祐斗はふと空を見上げた。その瞳は何処か遠く、ほんの少しだけ儂くもある。

「祐斗さん？」

しかし、その結衣の呼び掛けに反応する間もあらずこそ祐斗は再び口を開いた。

「俺、小さい頃に両親を亡くしてるんだ。それ以来極力人との接点を避けてた」

途端祐斗の真横でハツと息を飲む声が聞こえる。ふと立ち止まり、祐斗の遠ざかる後ろ姿を見つめる結衣。

突然の力ミングアウト。それは結衣にとつて衝撃としか言い様のない出来事だった。

「へえ、学園の近くにこんな洒落た喫茶店があつたのか」

外装は清楚な印象の強い純白で統一され、カフェテラスにはフラン

スなどでよく見かける赤と白のパラソルがある。

結衣の寄りたい場所はこの喫茶店だつたらしいが、一人で入るのは少々気が引けるため付き添いとして祐斗を誘つたらしい。

立て看板には『喫茶 Schone Traun』とHレガントなフオントで描かれている。

シユネーとは独語で雪を意味する語で、トラオムは独語で夢の意味を持つ言の葉。

ゆえに、ここをよく知る者達は通称、シユトラやら、雪夢ゆめやらと呼んでいたりする。

売られている珈琲やお茶は本格的な機具を使用し、珈琲豆は本場アメリカの厳選されたものだけを使い、お茶の葉は紅茶から烏龍茶、緑茶、アップルティー、ハーブティーに至るまで数十種に渡る種類を誇る。若者が集う場所としては最適である。

「…………」

結衣はつい先程運ばれてきたティーカップを見つめながら、しかし口をつけようとしない。

俯いたまま指先でカップを触つたり、時折小さくため息をついたり。祐斗の言葉に耳を傾けはするものの、話としては全く成立していない。

そして、話題も底を尽き、重い沈黙が一人の間を縛りつける中で。

「結衣。」

「えつ？」

突然何の脈絡もなしに自分の名を呼ばれ、結衣は驚いて顔を上げた。祐斗は祐斗で相変わらず落ち着いた面持ちのまま彼女を見つめる。

「……さつきの話、続きを訊きたい？」

その口調は不自然なほど自然で明るかった。祐斗の顔には今、笑みさえ浮かんでいる。

「あ、いえ……その……」

が、祐斗の言葉を否定しようにも結衣は完全に否定は出来ない。言い訳してこの小さな危機を脱出しようと理由が浮かばなかつた。

思わず田の前のティーカップを煽る。砂糖の甘味と紅茶の苦味が心地良かつた。

「……ふう」

小さくため息をつく結衣。祐斗は少し考へるとおもむりに口を開いた。

「気にならないはずないよな。あんな話、急に振られたら」

「え……わ、私は、別に」

無論、気にならない、と言えば相当な嘘だつた。

しかし、気になるから、といつ理由だけで
祐斗にとつてプライベートとも言えることを詫ねられたが、
結衣は無神經ではない。

「いや、気にしなくていい。俺も、結衣には話してもいいかなと思
つてたところだつたし、
訊いて欲しいからこそ、こうして話を切り出したようなものだ。」

祐斗はコーヒーカップを煽ると向處か遠くを見るようにして、落ち
着いた面持ちのまま語り出した。

♪2・Dear My・・♪(前書き)

祐斗の父、敏彦と母、幸江の生き様とその双方の遺伝子を引き継ぐ
彼自身の日常の旋律。

♪2・Dear My・・・

祐斗の母・君島幸江きみじま ゆきえは祐斗を生んで間もなく亡くなつた。それ以来父親の君島敏彦きみじま としひこが祐斗を男手一つで育ててきた。

敏彦はいつも着物を身にまとい、鋭い目つきで書斎の机にしがみついては、愛用の万年筆を軽やかに走らせる
そんな絵に描いたような堅物で、それこそ俗世間では”天沼芳樹”
といえば、それなりに名の知れた小説家だった。

学生時代から創作活動を始め、他界する63歳まで実に57作も書き上げており、

代表作は全盛期の24歳から41歳までの17年の間に書き上げた長編小説 Wild Writingシリーズ 全十一章。

日本文学界でもこの長編ファンタジー超大作は度々話題に上がつており、今でも数多くの熱狂的なファンが存在する、一種のミリオンセラー小説である。

彼の性格から一作書き上げるまでは誰も仕事場である書斎に入ることは許されない。

以前祐斗は彼の執筆中に迂闊にも書斎の扉を開けて、二つ酷く叱られたことがあった。

祐斗が再び目の前のコーヒーカップを煽ると、結衣はそれを目で追う。

「親父、こつも口ひるめられて、当時小学生の俺にどれだけ雷を落としたか。」

そう言つやせし遠い日をしながら、当時のことを探り出すよつて祐斗は薄つすらと苦笑いを浮かべる。つられて結衣も小さく笑みをもらした。

「……厳しかったんですね、祐斗さんのお父様って。
小説家って訊いて、最初は少し穏やかな感じの方だと思つてましたけど」

結衣は小説家というとロマンティストで普段は大人しい性格をしているのではないかとイメージしていたらしい。

事実、現代文学というとシチュエーションや環境設定などに凝つたり、キャラクタの構築に力を注いでいる創作物が多く、それらに触れていなくても本のタイトルに惹かれ、興味を抱くことは多分にある。

実際、敏彦はそれにピッタリ当てはまる逸材で、だからこそ全盛期の作品を中心にして、彼が創作・出版したものは今でも多くの人目を引いているのも確かだつた。

「元々は大人しかつたらしいんだけどな、ある時期を境に親父は変わつた」

「？」

言つや祐斗は空になつたコーヒーカップをコトツとテーブルに置い

た。

伏目がちで、けれど何処か鋭い眼差しのまま祐斗は続きになる言葉を口にする。

「親父は生まれつき体が弱くて、運動をしてもすぐにスタミナが切れ学校の運動会でさえ、まともに参加出来なかつたらしい……ほら、よくいるだろ？ 必ず、クラスで一人はそういう奴。」

そう。不思議なもので何処の学校でも多少の違いはあるが、共通する性格の子供がいるケースが多い。

クラスの空気を一気に明るくしてしまつほど陽気なムードメーカー。根拠のない自信で自分を高く評価する気取り屋。

何も興味がないと言わんばかりに無口で無愛想なすまし屋。喧嘩のとき、真っ先に中心人物となるガキ大将。

そして、身体、或いは心に傷を持つた、普段は大人しいけれど学校行事などでは密かにその雰囲気を愉しんでいたりする少年や少女。

敏彦は前者だった。そして、普段は然程目立たない少年で当時のクラスでも、特に何をするわけでもなく

ただ冷静に授業を聞いていたり、休み時間には喧嘩の多発する教室の中で静かに外の景色を見つめていたりしていた。

しかし、普段大人しいからこそ敏彦は少しづつ感受性を高め、それはいつしか彼自身の行動を限定するまでになつた。

「……それって、どうしたことですか？」

「つまり、感じすぎる感性がいつしかクラス中で親父の存在を、イレギュラーな存在へと変えてしまっていたんだ。

いくら周りの連中が親父を遊びに誘つたとて、極端に不器用な親父にはそれを拒絶する以外は選択がない。即ち「

身体の弱さと天性の人付き合いの悪さから、それ以来彼に率先して話し掛けたりする者はいなくなる。

例えいたとしても、敏彦自身がそこで一歩踏み出さうとしなければ、永遠にそれは変わらない。

そんな、いつまでも続く悪循環に胸が詰まりそうになつた時、ふいに彼の目の前にある一人の少女が現れた。

少女は敏彦と同じく普段は無口で大人しい生徒だったが、前々から敏彦の寂しそうな背中を見つめでは勇気が出せず声をかけられなかつた。

しかし、神様の悪戯は不意に訪れた。

ある日の放課後、敏彦が学校の外れのとある丘で相変わらず悲しみに打ちひしがれていた時、突然近くである物音がした。

カサカサツ　　という、近くの草原で感じられる草の間をゆつくりと這うよつた音。

そして、敏彦はその正体に気がついた。

蛇である。田舎の野原の中でさえ見ることはあるはずだが。

しかし、そんなことを考えていた時、突然近くから悲鳴のような声が聞こえてきた。

思わず顔を上げ、声のした方向へ向かって走り出す敏彦。目標はすぐ確認出来た。

自分と同じくらいの少女が目の前の蛇に怯え、泣き顔になつてそれを見つめている。

少女の体は震え、しかし恐怖で動けないのだろうか。その場から一歩も離れようとはしない。

咄嗟近くに落ちていた手頃な木の棒を拾うと敏彦は即座に少女を庇う形となり、蛇にそれを掲げた。

目からは大粒の涙が溢れていたが、その目つきは普段とは比べ物にならないくらい鋭く、力強い意志の力を秘めていた。

それに臆したのかどうかは定かではないが、蛇は暫しその身を揺らすと敏彦らを置いて近くの草原へと消えていった。

「それが……お母様の幸江さんだつたんですね」

「そういうこと。それ以来一人は学校でも常に行動を共にするようになった。

時を同じくして”学校一静かなカップル”なんて言われ、からかわれもしたが二人は幸せだった。」

つい先程ウェイトレスが運んできた一杯目の「コーヒーをジッと見つめると、結衣は何かを考えるようにしてそっと顔を伏せた。

祐斗はそれを知つてか知らずかカップを少し傾け、中身が零れるギリギリのところで固定させるとやがてカップを直角に戻す。

「今まで親父は自分が大嫌いだった。でも、オフクロと出会つて親父は変わった。」

よくあることだ。消極的な人間が自分の大切なものを得た途端、別人のように生まれ変わる。

それこそ、身体的に体力が人並以下なのは変わらないが、敏彦はそれを余りある精神力で補つた。

しかし、それはあまりに過酷な日々だった。変わったとはいえ元は大人しい敏彦である。

迫り来るプレッシャーに押し潰されそうになりながらも彼は毎日を必死に生きた。

そして、度々限界が近づき、幾度となく倒れはしたもののその都度、幸江が敏彦を介抱した。

幸江は「私にはあなたの力になれるとしたら、これくらいしかないから」と度々自嘲的な笑みを零したが、この事が返つて病弱な敏彦を強くした。

当然肉体的ではなく精神的にであるが、敏彦は幸江の包容力に支えられてばかりいることに言い様のない苛立ちを感じ、更に自分を極限まで追い詰めていった。

そのせいかお陰かは定かではないが、敏彦は見る見るうちに精神的な成長を遂げた。

彼にとつては唯一にして最大の支え　　幸江がいたからこそ今の自分があるのだと、彼は自ら語っていたという。

「でも、その無理がたたつて親父は高校一年生の秋、本格的に病に倒れた。」

訪れる重い沈黙。やがてフツと自嘲的な笑みを零すと祐斗が改めて

口を開いた。

「……悪い、つまらない話しちまつたな。今のは忘れてくれ」

途端歯切れが悪くなつた祐斗はコーヒーを飲み干すとその場に立ち、自分の分の勘定をテーブルに置くや、近くの学生鞄を手に取り、腕時計を見た。

「そろそろ時間もヤバイな。家まで送つてやるよ」

「……はい」

そして、喫茶店からの帰り道。既にオレンジ色の夕陽が見慣れた街並を真っ赤に染めていた。

何の感情も感じさせない表情の祐斗の真横、やや後方を歩く結衣の表情はやはり優れない。

結衣とて感受性が鈍いわけではない。祐斗の話にその背景をイメージするくらい簡単である。

そして、だからこそ余計な口を挟むことなど彼女には出来ない。そうしたところで、彼が虚しくなるのは目に見えているのだから。

「おい……何か話せよ」

不意にそんな言葉を投げかけられ、結衣はハツとして顔を上げた。案の定、視線の先には真剣な眼差しの祐斗がいる。結衣の胸がチクリと痛む。

「え？ あつ……はい」

しかし、特別話題もなく、いつしか結衣はちょっとした罪悪感に襲われていたため、続く言葉が見つからない。

祐斗とは違い、結衣は10年程前のある事故によつて父親を「くしゃいた。結衣がまだ、幼稚園の年少の頃だ。それ以来、結衣の母親・神崎珠美^{かんざき あけみ}は女手一つで彼女をここまで育ててきていた。

とはいえたが、彼女はまだ健在で、今も自宅にて夕食の用意をしながら結衣の帰りを待つているのだが、そのため結衣には彼の話が他人事とは思えず、迂闊な発言は慎むべきだと先程から口籠もつっていたのだった。

「……ごめんなさい」

「？ ……なんで謝るんだよ」

祐斗は不思議そうに、しかし少し怪訝しながら言った。
だが、結衣からは何の返事も返つてはこない。

少し考えると祐斗はおもむろに口を開いた。

「……まあ、いいか。とにかく行くぞ。

結衣のオフクロさん、心配してるとかもしれないからな」

祐斗にとつては、結衣が何故謝ったのかは大体想像がつくし、何より周囲が段々暗くなつてきている。

そのため一刻も早く彼女を家へ送り届けるのが先決だと判断した上で、祐斗は敢えて結衣を帰路へ促した。

「つ…………ふう…………。」

結衣を彼女の自宅まで送った祐斗は着替える余裕があらばこそ、制服のまま自室のベッドに倒れ込んだ。

結果的に生い立ちの「お」の字も話せなかつたが、それでも今祐斗の身体の周囲を覆う疲労は普段とは比べ物にならない。

それほど彼女に自分の身の内話をするのは大変なことだった。それこそ、聞いている結衣に勝らずとも劣らないのは確かであろう。

「……やっぱ慣れないことはするもんじやないな

苦笑混じりに祐斗は仰向けるになると既に陽光の闇ざされた自室の天井を見上げた。もう電気を点けずとも瞳に映るその景色は浮かぶ。何より身体のダルさが祐斗から電気を点けるという単純作業さえする氣をなくさせ、同時に暗闇に妙な心地良さを残した。

不思議と疲れが次第に引いていくのを感じながら、祐斗は不意に起き上がつた。

「わすがに、このまま寝たらマズイか。しゃーない

言つや学ランのフックを外し、そのままチャックに勢いよく手を掛けた。

途端一斉にチャックが落ち、中に着ているYシャツが露わになった。

今日は色々ありすぎた。明日に備えることは、風呂入つてそのまま寝てしまつのが一番だ。

翌日の中野学園一年A組の授業風景。窓際の席に座る祐斗に、教壇に立つ教師の声と訊いている様子はなかった。

頬杖ついて窓の外を見つめている。その視線の先 教会前のベンチには人影一つ見当たらず、気づくと淡い靄がかかつた。

気づいたように祐斗は瞳をしっかりと開き、窓に当たる幾つもの水の雨に視線を向けた。

「…………」

雨は窓を容赦なく叩き、次第に強まっていく。外の景色は完全に遮られ、祐斗はふと表情を曇らせた。

祐斗は雨が嫌いだった。雨は祐斗の心に惨めで荒んだ日々を思い出させるから。

世間の冷たい視線。当然のように繰り返される中傷・誹謗。そんな環境にいた過去があるだけで、まさに生き地獄だ。

しかし、現実はそんな彼を嘲笑つかのように何の救いも齎してはくれない。

今になつてみればそれも過去の出来事ではあるが、すぐに忘れられるものでもない。

「おい……おいつ！ 聞いとるのか、君島あーー！」

「あ……」

いつしか回想に浸っていた祐斗は不意に担任に自分の名を呼ばれ、慌てて席を立つた。

「……すみません、聞いてませんでした」

言つや氣まずそうに祐斗は合わぬ視線をただ宙に漂わせる。担任は途端勘弁してくれと言わんばかりに苦笑を漏らす。

「おこおい、しつかりしろよ。おまえ、今度のテストで80点以上取らなければ追試だぞ」

「……はい」

しかし、普段から予習・復習を怠らない祐斗にとって、テストは取るに足らない問題である。ふと視線を窓際に戻すと、雨脚は先程より明らかに強まっているようだと思える。

今日は、厄日だ。祐斗はふとそう思つた。

そして、そんな彼に心配そうな瞳を向けている者がいた。

廊下側の一一番後ろの席に座る女子生徒　肩まである栗色のショートカットと幼い瞳。

「……」

彼女は祐斗と小学校の頃から同じ学校で、中学まではよく彼と話をしたりしていた。所謂腐れ縁といつやつだ。しかし、最近は一匹狼を自称する彼の独特のオーラに怯え、まとも

に言葉を交わしていない。

とはいって、彼女自身は彼を嫌いしているわけではないので、どうにか話そう話そうとはしているのだが。

時は流れ、休み時間。廊下の隅の窓を鬱陶しげに眺めている祐斗に近づく一つの人影があつた。

「……君島君」

不意に名を呼ばれ、祐斗は声のする方に視線を向けた。視線の先には見慣れたショートカットと童顔の少女。

「雨宮か。何、俺に何か用？」

言つや祐斗は再び視線を窓に映す。雨脚は先程よりは弱まっているが、しかしやむ気配は一向にない。

雨宮、と呼ばれた少女は少し俯き加減になると次の瞬間意を決して口を開いた。

「う、うん……君島君、最近なんかボーッとしてるよね。だから、ちょっと気になつて」

「……」

目の前の少女　雨宮透子に祐斗は前々から、極度のお人好しという印象を持っていた。

少なくとも家庭の事情のことで自分から助けを求めたことはないの

だが、彼女は自分から率先して彼の力になろうとする。

それが例えハイリスクなことでも、もはや彼女には関係ない。

彼の力になる」と。それが彼女にとっての喜びであり、幸福だった。

「別に、雨窗が気に掛けるようなことじやないよ」

「え。」

ふと声を上げる透子を余所に祐斗は窓から視線を逸らさずこきっぱりと言った。

「ただ……嫌いなんだ、雨」

「……」

祐斗の瞳には今、明らかに嫌悪が浮かんでいた。それが自分に向けられたものではないとわかつていても、透子はそれに心を痛める。途端、居た堪れなくなつて、透子は極力明るい声を意識して口を開いた。

「や、そつか……『めんね、邪魔だつたみたいだね。』

「……」

透子の声はかすかに震えていたが祐斗はそれに何も応えず、ふと窓から視線を外した。やがて、間髪入れずに透子が口を開く。

「それじゃあ……私は、これで。」

そして去り際、「『ごめんね、邪魔しちゃって』と付け加え、透子は教室へ戻つていった。

彼女の様子に内心穏やかではなかつたが、今の祐斗に彼女のことを探る余裕は何処にもなかつた。

雨宮透子と親しくなつたキッカケは、本当に些細なことだつた。小学校二年生の頃、算数の教科書を忘れた祐斗が、当時隣の席だった彼女に見せて貰つたのだ。

当時は今のように一匹狼ではなかつたから、祐斗は安易に透子を受け入れた。

そして、それ以来忘れ物をする度に祐斗は彼女に協力を煽つた。始めはあまり良い顔をしなかつた彼女だが、いつしか彼の屈託のなさに負け、結局は自分から協力する形となつた。

以来、同じクラスになることが重なつたのもあり、二人は腐れ縁と言われるまでになるのだが、

高校進学の年に祐斗の父、敏彦が病で倒れ、他界すると同時期に祐斗は人との関わりを一切断つた。

葬儀やら何やらで「ゴタゴタがあつたのも理由の一つだが、何より世間の目が彼に対しても尋常ではないほど冷たかつた。

特に関わろうとはせずに、陰ではこそ噂話、拳句の果てには陰口を叩く者までいたといつ。

当時の事情を知っている透子は今まで以上に祐斗を心配するようになつた。

両親をなくし、住む場所がなくなつた彼に自分の家に来るようことが勧めだが、

祐斗は透子とその「両親に迷惑を掛けたくない」という理由で、そのまま申し出はキッパリと断つた。

しかし、祐斗が人との接触を断つたのはそんなゴタゴタがあつたがゆえ、である。

本来なら多少人に迷惑がかかつても居候という形でお世話になることは十分に在り得た。

けれど、その頃の彼は既に人として大きな挫折を経験していたのかもしかれなかつた。

「……独りがこんなに辛いなんて、思わなかつたな」

祐斗のそのが細い咳きは、やがて鳴り響くチャイムの音に搔き消された。

独りには誰より慣れていはずだつた。しかし今、祐斗は明らかに孤独を感じてしまつてゐる。

何とも情けないことだ。

～3・波紋、拡がつた頃には～（前書き）

祐斗の憤怒と結衣の涙。それらの意味するものとは一体

。

～3・波紋、拡がりきる頃には～

水曜日の放課後。今だ雨は降り続いていた。

B組の結衣は帰りのホームルームが終わるやくづいたように意識を隣のクラス 祐斗のいるA組に向ける。

雨が降っている以上、いつもの場所で彼と会うことは出来ない。昨日の今日では、むしろその方がいいのかも知れない。

しかし、結衣は祐斗の存在を求めていた。

昨日、話を最後まで聞けなかつたこと。

家に送つて貰つたのにちゃんとお礼を言ひていなかつたこと。

様々な思いが彼女を動かす。

しかし、隣のクラスを覗くと彼の姿はなく、疎らに生徒の姿があるだけだつた。

やりきれない思いにかられながら結衣は仕方なくその場を後にした。

そして、昇降口。

「……祐斗さん」

気づいたように結衣が声を上げた。視線の先にはスラッと伸びた背丈にほんの少し儂げな雰囲気を湛えた少年。しかし、彼の様子を気にしてか結衣は少し躊躇つた後、下駄箱へ行くと靴に履き替えるやそのまま玄関を出て行つた。

今は話しかけられない。普段通りの態度を出来るかすらわからぬのに、こんな不安を抱いたまま彼と会話なんて出来ない。

結衣はそつと決意し、苦渋の表情で姫野学園の校門をくぐり、そのまま大急ぎで自宅までの道のりを走り始めた。

一方、祐斗が校門を出ると今だ止む気配すらない雨に憂鬱な気分になりながら、やがて意を決して前に向き直る。
いつまでも下を向いて歩くのはよくない。何より気分が晴れないのだから、そうしたところでの背後には冷たく暗い影しか落ちとさない。

「ひー？」

ヒ、数メートル進んだところで不意に後ろから抱きつかれるような感覚に襲われ、それに驚いた祐斗は身を翻して自分を掴む人物に瞳を向けた。

「よつー！ 祐島。ヤケに暗い顔してるな、何かあつたか？」

何だ、この馴れ馴れしさは……とも思つたが、祐斗は自分の体から彼の両手を振り払つとすました顔のまま言つた。

「……別に、おまえには関係ないだろ」

祐斗はあからさまに不快な表情を露わにしているが、目の前の男にそれを気にした様子はない。

人懐っこい、といふか極端に凶々しい人間に出会ってしまったと祐斗は少し頭を痛めたが、間髪いれず口を開く少年。

「なあ……おまえ、最近女の子とよくいるよな？
敷地内の講堂で……あれ誰なんだ、おまえのコレか？」

吉川や少年は自分の右手の小指を立て、祐斗に示した。

小指立ては即ち、”彼女”的意。

結衣とはたまたま居場所が同じだけでも別にそれだけで親しい関係ではない。

しかし、祐斗はそれを否定するのも面倒と言わんばかりにその男を睨みつけた。

「うおっ！？ そんな睨むなよ。大体話してる人がいるんだから、それに耳を傾けるのが礼儀つてモンだろ。そう母親から学ばなかつたのか？」

「それを言うなら、おまえは初対面の人へのマナーつてもんを、学ばなかつたらしいな」

やれやれ、と大袈裟にため息をつく祐斗。

先程からの彼の態度にいい加減無視するのも疲れてきていた。

「何言つてんだよ。俺はおまえと同じクラスの檜山和人。
たしかに一度も話してないかもしれないけど、一応クラスメイトだぞ」

吉川や男

ひやま
檜山和人

かずひと

は自分を指さした。

言われてみれば祐斗は目の前の彼の顔に見覚えがある気がした。

「……そつみたいだな。」

「うわっ、ひでえ！」

和人は本来クラスメイトであるはずの祐斗に初対面扱いされたことに非難の声を上げる。

しかし、本気ではなくあからさまにふざけた口調なため、本気で非難しているわけではない。

祐斗は先程から和人の大袈裟なリアクションに苦笑を漏らしていた。自分とは正反対の性格の同級生。それは、最も自分が忌み嫌うはずの存在。

しかし、どうだろう。最初こそ彼にあまりいい印象を抱かなかつたものの、

和人と言葉を交わすことはむしろ安らぎすら感じさせむほどの穏やかなものに変わつていく。

彼の人柄のせいだらうか。小一時間ほど会話を繰り返すと、不思議と次々に紡いでいく彼の言葉に特別深い嫌悪を感じることはなくなつた。

とある十字路に差し掛かると和人は祐斗に向き直る。

「じゃ、また明日な。祐斗」

「ああ。」

それだけ言葉を交わすと和人は祐斗とは逆方向へ歩き出す。それを見つめながら小さく笑みを零す祐斗。

次に学校で会った時は、今までのようになんでか人に拒むことはしないだろう。
少なくとも彼と話すことにもう抵抗はない。いつしか祐斗は和人に心を開き始めていた。

しかし、それが後にどんな事態を引き起すことにならうとは、予想だにしなかつたのだが。

一方、こちらは場所変わつて古風な印象の強いとある家庭。

瓦造りの屋根と家全体をしつかり支えている数本の柱。
庭にはいくつかの竹筒を固定して作られた獅子威しがあり、
水が溢れてはその度に、カコンッ　　と良い音を立ててゐる。

やがて、玄関に薄いグレーカラーのセーラー服を着た少女が優れな
い表情のまま現れる。

玄関に入るや、少女はほんの小さな声で「ただいま。」と言い、静
かに扉を引いた。

「あら。おかえりなさい、結衣。」

「……うん、ただいま。お母さん」

一見して子持ちには見えないほど綺麗でシワ一つない顔立ちと容姿。
少女　結衣の母・珠美。彼女は娘の結衣に似てどこか儚げな雰囲

氣を持つ女性だった。

10年前、不慮の事故によりこの世を去った父・神崎和也かんざき かずやを心から愛し、現在は生涯独身を心に誓つ。それが彼女。

事故直後、和也を失つた珠美は酷く落ち込んで一時は食事も喉を通らなかつたが、彼女には当時幼かつた結衣を養うという義務があつた。

結衣は小さい頃から大人しく素直な女の子めのこだが、反面泣き出すと止まらない。

しかし、珠美にとって結衣の存在はまさに天使のようなもので、その泣き顔すら愛しかつたといふ。

つまり、愛娘・結衣の存在が今の珠美を形作つていると言つても、もはや過言ではなかつた。

「……元気、ないみたいね。」

母は結衣が真つ直ぐに自分を見ていないと少し表情を沈めた。

普段、結衣が人と話す時は相手の目を見るが、今は違う。何処か伏目ふもくがちで視点もはつきりしていない。

「うん、ごめんなさい……お母さん」

消え入りそうな声で結衣は言った。

母を前にしてもいつも通りの自分でいられない。

そんな自分に歯痒さを感じながら、ふと顔を歪める。

そして、珠美は少し間を置くと、やがてクスッと笑みをもらす。

「……いいのよ、結衣。さあ、早く着替え済ませちゃいなさい。お食事出来たら呼びにいくから、それまで休んでいて……ね？」

「うん……ありがと」

結衣は母の言葉に頷くそのまま真っ直ぐ自分の部屋へ向かう。結衣の部屋は階段を上がつた二階の突き当たりにある。

小奇麗に整理された和室。壁伝いに背の小さい勉強机があり、部屋の中央には丸い卓袱台がそれぞれ配置されていた。

襖を開けると押し入れの上辺には布団、そして下辺に箪笥が収納されており、そこには結衣の私服が納められている。

結衣はセーラーのスカーフを解くとそのまま私服へ着替え始めた。当然の如く、終始結衣の表情はやはり優れない。

やがて着替えが終わると結衣は部屋の窓を開ける。

心地良い風が室内に流れ、空気が浄化されていくのを感じながら、不意に瞳を閉じる。

「…………」

いつから、こんなに弱くなつたんだらう。

いつしか結衣の心は大きな不安で埋め尽くされていた。

人と話すことでもさえ安易に出来ない。そんな自分が悲しくて、やりきれなくて、結衣はそのまましゃがみ込むと自分の膝を抱く。

スウ　　と瞳を閉じ、やがてそこから溢れ出した何かが頬を濡らした。

程なくして今度は定期的に嗚咽のようなものが聞こえ始める。

明けて木曜日、祐斗はあからさまに不機嫌だった。その原因は言つまでもなく先日出来た友人　和人である。

「というわけで、君島さん。こちらの書類にサインか印鑑を御願い致します。あ、捺印でもいいですよ？」

言つや紙束を祐斗の机の上にドサッと置き、少女はにつりと微笑んだ。

その紙束の表紙には『君島祐斗に関する個人データ』と記されており、下記に印鑑を押すスペースがある。

恐らく個人情報である。名前は既にそのスペースのすぐ脇に書かれており、それが余計祐斗の機嫌を損ねた。

祐斗はこの書類にサインした覚えはない。というより、見ることすら今がはじめてだ。

にも関わらず、その書類とやらには彼の名義でサインがある。実に摩訶不思議である。

「……おい、和人。おまえだよな？　このへタクソな字」

「あー、あくつー！」

すぐ脇に今にも逃げ出しそうな男子生徒　　和人を確認するや、祐斗は彼にヘッドロックをかける。

「ぐつ！　祐斗、ぐるじー！　はな……せ……つてえ……！」

「あまり抵抗しない方がいいぞ。余計入るから」

顔を苦痛に歪める和人を余所に祐斗はあくまでにこやかに言った。
その様子を先ほどからポカソンと口を開けて見守っていた少女が口を開く。

「あの……？」

「あ、悪い。えっと……西篠さん、だっけ？」

悪いけど、この話はなかったことにしてくれないか

「えつ？」

西篠、と呼ばれた少女は祐斗の言葉に思わず声をあげた。

彼女の家　　西篠財閥は地元では有名な富豪でその権力と財力は計り知れない。

この一家に関わると口クなことがない、といつ話を祐斗は前もって知っていた。

何でも少女 美奈子は西篠家の一人娘で筋金入りのお嬢様で、見おしとやかそうに見えて実はどんな世間知らずらしく、今も『一人の御学友になる』というのを条件に祐斗の個人情報を入手しようとしていた。しかし、彼女に悪意はない。そこにあるのは、単純な好奇心だけ。

元は和人の目論み 美奈子と親しくなりたいというただそれだけのために、祐斗は自分の個人情報を半ば強制的に掘り起こされたのである。

そこには当然、他人に知られたくない両親絡みの情報もあるであろう。祐斗はその紙束を無造作に掲げるとそのまま真つ一つに引き裂いた。

「あっ……！ な、何てことをするんですかー？」

そう言って慌てふためく美奈子を余所に祐斗は引き裂いた紙束を一つにまとめる、すぐさまそれで美奈子の視界を遮った。

「まあ待て。」

「きやつ……な、何ですか？」

急に目の前が遮られ、少しだけ顔を赤くして声を上げる美奈子。しかし、次に瞳に映つたのは思いのほか真剣な祐斗の顔だった。

「……っていうか、所詮これはコピーだろ。これの元となつたデータがあんたの手元にはある。違うか？」

美奈子は祐斗から紙束を受け取るとふと瞳を伏せ、再び祐斗を見た。

「……たしかに、ありますけど。
でも、それにはあなたのサインがありません」

「……」

そうやら美奈子はサインのあるなしに拘つてゐるらしい。
しかし、元々和人が偽装したものゆえ、その価値はないに等しい。

「たとえそうでも、あんたが俺の過去を知つていることに変わりはない。

勝手に人の過去を掘り下げる、本人の知らないところでそれを読み耽る。それがあなたの趣味か」

祐斗はあくまでも荒々しく美奈子に言い放つ。
対する美奈子は、既に瞳に涙を浮かべていた。

「趣味だなんて、そんな……私はただ、あなたのことことが知りたくて……だから！」

「だつたら俺に直接声をかけるとか、もつと手つ取り早くて確実な方法が他にあるだろ。何故こんな手の込んだことをする必要がある？」

人の過去は本人ですら時間をかけて蓋をしてしまいたいものだつて存在するんだぞ。それを土足で入り込んで何が樂しいつ？！」

辛い思い出を人に、しかも自分の知らないところで掘り起こされている事実。

祐斗にとって、それは耐え難い苦痛だった。

「…………う…………うあ…………く…………つ」

祐斗の言葉にすっかり大人しくなった美奈子は引き裂かれた紙束を抱くと小さく嗚咽を漏らし、そのまま泣き崩れた。

彼女の性格で祐斗の言葉は重すぎる。

一つため息をつくとその肩に手を置き、祐斗は美奈子に視線を合わせた。

それに気づき、和人が声を上げる。

「お、おい……祐斗？」

しかし、祐斗は小さく首を振ると無言で和人を制する。思わず口籠もる和人。

元はといえば自分の浅はかな行動から始まったことだ。今更交わす言葉さえもない。

「…………悪いけど、俺は行くぞ」

そう言うと祐斗は美奈子の肩から手を離し、そのまま教室を荒々しく出て行く。

それをただ呆然と見送る和人。当然ながら未だ美奈子の涙は止まらない。

重い沈黙が周囲を包む中、和人は気づいたように祐斗の後を追いかけた。

「お、おい、祐斗っ！ ちょっと待てよ！」

その声に気づき、祐斗は不意に足を止めた。声の主は勿論和人である。

「おまえ、あれはちょっと酷なんじゃないか？ 彼女、いいとこのお嬢様だぜ」

「なら尚更許せない……人のプライベートを根掘り葉掘り」

「はつ！？ おまえ、一体何言って　」

しかし、そこまで言うと和人はある事に気づいた。
祐斗は今、何かを耐えるようにして唇を震わせていたこと。

「……祐斗。」

驚いた和人はどこか意外そうに声を上げた。祐斗は間髪入れずに口を開く。

「いろいろとこのお嬢様でもやつていいことと悪いとの区別もつかないようじや、西篠家も終わりだ」

物事の善悪を見極める力 それが今の美奈子に決定的に欠けているもの。

何せ箱入り娘という意味では折り紙付きの彼女である。それは当然の成り行きと言えた。

「あの様子じゃ、彼女、自分を本気で怒ってくれる人すらないんだ。何不自由なくぬくぬくと育つてきただ美奈子お嬢様と俺じゃ、根本的に人の出来が違う」

昇降口を降り、祐斗はそのまま玄関を抜けた。
和人はふうと小さくため息をつくと不意に意識を階段上に送った。

ちょうどその頃、美奈子は今だ1年A組の教室で泣き続けていた。涙は止め処なく溢れ、美奈子は途方もなく深い孤独の中にいたのだった。

そして一悶着あつた後、祐斗は久方振りに学園の敷地内の教会に足を運んでいた。

そこにはいつもはいるはずの結衣の人影はなく、取り敢えずホッと胸を撫で下ろす。

今は出来るだけ人には会いたくない。

何より会つたところで気分が晴れるとは思えないから。

しかし、そんなささやかな願いは無情にも断ち切られることになる。

軽く数分が経つた頃、コツコツコツと地面に靴が擦れるような

音がし、

それにつられてそちらに意識を向けてみると、そこには最近見ていなかつた顔があつた。

「元気……ないですね。」

「……………そうか？」

スツ　　と結衣が祐斗の隣に腰を降ろすと、祐斗は前かがみになつていた体を起こす。

「どうかなさつたんですか…………？」

結衣は心配そうに祐斗の顔を覗き込んだ。

少し間を空けると祐斗はため息混じりに呟く。

「……………まあな」

「……………」

さすがに結衣もそれで只事ではないと思つたのかふと口を開いた。固唾を飲む結衣。しかし、祐斗は両の指を絡ませると不意に口を開いた。

「……………なあ、もし自分が人には知られたくない過去を、赤の他人に陰で調べられてそれをネタに強請られたら結衣なりどうする？」

「……………くつ？」

突然の話題投下に結衣はただ呆然とするしかない。

しかも話はあまりに非日常的すぎていまいち状況が掴めない。

しかし、祐斗の顔は見るからに真剣でとても冗談で言つてこるとは思えなかつた。

「それが……あなたの今の状況なんですか？」

「ま、簡潔に言えればそつこいつ」とだ」

西篠家のお嬢様である美奈子の御学友になるためだけに過去を売らねばならない。

勿論、直接的な強請りではないが、祐斗にとってはそれが一番しつくつくる表現だつた。

「… はあ」

が、いまいち実感が湧かない結衣。

それを余所に祐斗は小さく苦笑を浮かべた。

「悪いな、わかりづらくて」

「えつ？」

きょとんとする結衣。自嘲的な笑みを漏らすと祐斗が再び口を開く。

「いや、おまえの顔がそつこいつてるから」

「……あ、すみません」

祐斗の言葉が府に落ちたのか結衣は申し訳なさそうに顔を伏せる。しかし、実際は謝罪するほどの悪いことはしていないはずだった。

祐斗が再び苦笑する。

「だから、すぐに謝るなよ。別に特別瘤に障ったわけじゃない。ただ単に自分の陥った状況が他人からしたら極端にわかり辛いってだけだ」

実際、これ以上心配かけまいと事実をありのままに話そうとしたが、結衣はすぐに理解するには至らなかつた。

勿論そこには自分の言葉が足らなかつたという理由も大いにあるが、元々言葉だけではいまいち説明力に欠ける。

「えーっと……つまり、過去の情報をネタに、あなたは……その、強請られたと？」

恐る恐る問う結衣。しかし、その答えは意外とすんなりと返ってきた。

「いや、実際はどつかの世間知らずのお嬢様の御学友になるのを条件につい先日知り合ったばかりのどつかの阿呆に自分の過去を売られただけだ」

「成る程、少し会わない間にそんなことが……」

祐斗が結衣に事の経緯のすべてを告げると、結衣はやがて納得した

よつね声を上げた。

たしかに彼の体験談は先の問い合わせの内容に深く関連している。すぐにはわからなかつたのはやはり祐斗の説明不足からだつた。

「ああ……困つたものさ。ただでさえ、毎日憂鬱に暮らしていたのにそれに拍車をかけるようにどつかの物好きなお嬢様の”検問”に引っ掛けつちまつたんだからな」

人の過去を引きずり出して、それをネタに金持ちお嬢様の御学友になれなんてどう考へてもまともな展開ではない。

それは、自分の過去を売るだけで地元でも有数の権力と財力をを持つ西篠財閥のご令嬢と関わりを持てるのなら安いものだと思つ者もいるかもしれない。

しかし、少なくとも祐斗には美奈子の存在などどうでもよかつた。特別気になつてゐるわけでも、まして好意を持つてゐるわけでもないのだ。

「それは、大変でしたね……でも、その西篠財閥のご令嬢 美奈子さんでしたか」

「ああ」

結衣は祐斗に西篠美奈子の名を再確認するとおもむろに口を開いた。

「……彼女、それだけあなたのことが気になつていたんだと思います」

「ええ？まさか」

意外そこに言ひう祐斗。

「だつて祐 …… いえ、君島さん、結構学年でも評判いいですか
ら」

下の名前で呼ぶのがしつくりこないと感じたのか結衣は敢えて苗字で祐斗の名を口にした。
勿論その中には、彼の”隠れファン”の女子たちへの負い目といふのもある。

実際、祐斗は常に少々近寄りがたい雰囲気を湛えてはいるが、とても整った顔立ちをしていて学園内でも”隠れファン”が結構いるらしい。

何でも、幼い顔立ちに宿る憂いを帯びた瞳がたまらないのだと
か。

しかし、結衣は少し前から祐斗と仲良くしていて、その頃からクラスメイトや同級生の視線が厳しくなり始めたことに気づいた。
それは所謂、嫉妬という一つの感情の現れであり、その負い目が彼女を講堂前のベンチへ足を運ばせなかつたことさえある。

そして、最近本格的に結衣の学園での評判はガタ落ちしていた。特に、女子生徒の間からは。

「……だから、このように権力で過去を掘り返す人間が出てきても仕方が無い、と?」

少し間を開けると、呼び名が変わったことに多少怪訝しながらも祐

斗は結衣に問い合わせる。

「あ……勿論、人の過去を勝手に調べることはいけないとは私も思います。

君島さんと同じことを私がされたら、きっと辛くて耐えられなかつたと思いませんから」

気づいたように結衣は言葉を付け足した。

結衣にも幼稚園の頃に父を亡くしたという記憶がある。それを人に知られ、それをネタに理不尽にも自分が学友になることを勧められたら、いくら相手が財閥の御曹司でも嫌悪を露わにするに違いない。

やがて暫しの沈黙が訪れ、周囲に異様な雰囲気が漂い始めた。別に不快というわけではない。

秋風と相俟つて、本来ならば心地良いのだろう。しかし今の祐斗にとってはあまり良いものではなかつた。

「……それで、これからどうされるんですか……？」

「どうするもいりますが、俺に出来ることなんかないだろ

祐斗は財閥のお嬢様が相手では何を言おうが無駄だと思った。育ちが違うのに何故意見を共通させることが出来るか。

「さうでしょ？ 私には、君島さんは現実から逃げているだけのように思えます。

……出来る」とは……いえ、君島わんにしか出来ない」とは、あつとあります。」

「…………」

そうかもしない。実際、既に美奈子相手に一通りの弁明は済んだ。そして、彼女からそれを否定する言葉は聞こえなかつた。いや、正しくは否定出来なかつたのだろう。温室育ちのお嬢様に捻くれ者の祐斗の言葉を否定するだけの知識と精神力はない。

しかし、だからと云つて今のままでは何処か胸のうちがスッキリしないのも事実だ。

もう一度会つて話の一つでも出来れば、もしかしたら和解のキッカケが出来るかもしれないが。

「『めんなさい、ナマイキを言つてしまつて…でも、美奈子さんはきっと、あなたが思つほじ悪い女の子ではないはずです』

わかっている。祐斗とて彼女に悪意がないのは百も承知だ。しかし、自分のされた事を思えば、それは気休めにもならない。

祐斗は一つ小さな溜息をつくと不意に空を見上げた。

いつもと変わらない空。しかし、そこには肝心な何かが欠けていた。

一方ちょいどその頃、校舎には一つの影があつた。

ショートカットの少女。意外なことに、雨宮透子だった。

実は先日から祐斗の心配をしていた透子はふと視線を送った先に学園一の美少女と名高い神崎結衣の姿があることに驚き、その隣に普段は一匹狼を貫いているはずの祐斗が特に拒絶反応も見せず、結衣と親しげに話をしているのに動搖を隠せなかつた。

ついさっき、檜山和人が西篠美奈子に祐斗の個人情報を売買していたことは透子も廊下から漏れ聞いていたために知っている。そして、祐斗が凄い剣幕でほぼ初対面のはずの美奈子を怒鳴りつけ、明らかに嫌悪を露わにしていたのも見ていた。

そんな最悪の状態の彼と共にいて拒絶されず、しかも祐斗の顔には今笑みさえ浮かんでいる。

この時、透子は君島祐斗と神崎結衣が同じ姫野学園高等部一年の同級生という、ただのありふれた関係でないことを初めて思い知られた気がした。

～4・交わされる言葉は如何な戯曲か（前書き）

透子と遙。そして、祐斗と和人。それぞれの想いがそれぞれ違った形の旋律を奏でる。それは不協和音か、それとも協和音たりえるのか。

～4・交わされたる言葉は如何な戯曲か～

その日の夜。

女の子らしい優しい色彩の壁紙に可憐なデザインの小物類が数多く飾られている雨宮透子の私室で、

透子はコードレスフォンを手にしながらベッドの上で膝を抱えていた。その顔は、やはり優れない。

『　そう。コウがあの神崎さんと』

「うん……」

コウ、とは勿論祐斗のことだ。

電話の相手は透子の中学校の頃からの親友、大隈遙^{おおくま はるか}。そのハスキーな声と活発な性格はクラスでも人気を博している。

高校に上がってからは透子とクラスは違えど、前と変わらず仲良く過ごしている。それは時々ケンカはするが、それも仲のいい証拠。

『話には聞いていたけど、そこまで彼が心を許すのってやっぱり重 大よね。特にアンタには』

祐斗と結衣の噂は学内でも有名でそれは当然遙の耳にも聞こえてきていた。

しかし、一匹狼を自称する祐斗の胸の内に秘められた孤独。

それを少しずつとはいえ浄化している結衣は今、彼にとつてもとても重要な役割の中にある。

しかし、だからこそそこが問題なのだ。

「……別に、私は」

『バカ、そこで強がるんじゃないよ』

透子の声を遥は間髪入れず遮つた。想い人の想う相手がどんなに強敵でも、そこで諦めれば恋はその瞬間、儚くも朽ち果てる。確かに結衣は美少女で、同時に人を包み込むような包容力を兼ね備えているかもしれない。しかし、だからと言つてただ諦めてしまうのは釈だらう。

『 今、彼の事情に一番通じるのは、他でもないアンタなんだよ?』

そりや、たしかに神崎さんは美人だし頭もいいしで学内ではそれなりに人気があるかもしれない。

でも、元を正せば透子には神崎さん以上にユウとの面識がある。それを無に返すワケ?』

透子は祐斗と小学校低学年からの付き合いだった。高校に上がつてから彼と出会つた結衣とは根本的に過ごしててきた時間が違う。しかし、出会つた当初透子は祐斗とあまり親しくはなかつた。それは初めから親しみを持てるはずはないが、だったら今の結衣はどうか。

出会い系で間もない頃、透子は彼とすぐには親しくなれなかつた。環境が違うというのもあるだろうが、それにしても結衣のケースは特異すぎる。

幼い頃に母親が他界して、高校上がる直前に父親まで亡くして、それ以来世間の冷たい視線に耐えながら祐斗は一体何を思ったのだろうか。

どんなに苦しくても、どんなに辛くとも自ら周囲の人間に助けを求めることは出来ない。その前に、祐斗はちよつとした人間不信に陥つていたのだから。

透子だつて何度も彼を助けようと思つた。しかし、幾度となく祐斗はその協力を拒み、自分に素つ氣無く接するだけ。この前の休み時間の時のように。

『透子が勇気を出せないでいる理由、あたしわかるよ。

少し前までは親しかつたのに急に余所余所しくされちゃ、誰だつて堪えるわ』

「始めは何とかしようと思つた。でも、私じゃダメだつたの。

……私じゃ、神崎さんみたいに彼の支えにはなれなかつたんだ」

透子は痛感していた。自分が無力であること。そして、結衣になら祐斗の力になつてあげられることを。

いくら望んでも透子に結衣のような包容力はない。祐斗の心の傷を一番癒してやれるのは自分ではない。結衣なのだ。

『透子、あんまりあたしに心配させないでよね。もしアンタがボロボロに傷ついたとしたつて、あたしはアンタを本氣で責めることなんかないんだから』

中学時代の負い目もあるし、それでなくとも透子はすぐに何かと追い詰めてしまう性分なのだ。

遙は例え透子が自分の命を自ら絶とうとしてももはや安易にそれを止めることは出来ないだろうと思つた。

もし軽はずみな言葉を並べたとしても、それは透子の心には響かない。

逆に言えば、それが悪い意味での引き金となる可能性すらある。

そもそも遙が透子に出会った中学当時、遙はクラスで一人浮いていた。

逆に透子は持ち前の明るさで周囲を賑わすムードメーカー。

そんな一人がこうして高校に上がった頃にはすっかり親友同士になつていることなど、その時は一体誰が想像しただろうか。

かつて遙は学校が嫌いだった。日々の授業は殆ど寝て過ごし、休み時間になるとそのまま担任の許可なく早退したことさえある。

出席日数の関係でまた登校してきてもやはり普段の態度は変わらず、相変わらず不良のお手本とすら言っていたほどその生活態度は悪かった。

しかし、そんなある日、PTAでそのことが問題になつた。

つまりは、ある生徒の親が遙の存在 자체を問題視したのである。

あの子の生活態度には日に余るものがある。このままの生徒の行動を許しては周りの子供達にも害が及ぶのも時間の問題だ。その親の言い分はこうだった。しかしそんな風に言われることに遙は何の感情も湧いてはこなかつた。

しかし、一つだけ気に掛かることがある。

それは遙が自宅謹慎を言い渡される三日ほど前、いつも通り遙が昼前に早退しようとしていた時、それを遮るよつにある一人の少女が現れた。

当時クラス委員だった透子である。

その時はちょうど祐斗とも仲が良く、透子は毎日笑顔を絶やさず暮らしていた。

大好きな人と一緒にいられる幸せ。女の子ならこれ以上の幸福はないと言える。

しかし、そんな中でいつも遙の存在は何処か気にかかり、それは例え祐斗と話をしていた時であっても変わらなかつた。

大隈遙。何処か鋭い、しかし寂しげな瞳を持ち、同級生とは思えないほど大人びた容姿をした女の子。憂いの帯びた表情は、若干の祐斗と被る。

これで生活態度さえまともなら人気が出ても何らおかしくはなかつただろうに。現実はそんな甘い幻想を嘲笑うかのように冷たい不協和音を奏でた。

「……何の用」

中学校の校門前、追いかけてきた透子に遙が言つた。

その顔は透子からは見えないが明らかに嫌悪が浮かんでいることだらう。

「何の用つて……まだ授業終わつてないよ。大隈さん、帰つちやダメだよ」

「関係ない」

言つちや透子を振り切り、そのまま校門を出て行こうとする遙。しかし、透子は慌てて遙の目の前に立ちはだかった。

クラス委員の義務という問題も勿論ある。しかし、何より透子は心から遙のことを心配している。それだけは確かだった。

この頃、既に一部のPTAが遙の生活態度を懸念し、クラス委員である透子は彼女を説得するように担任から言われていた。

実際このままでは学校を追い出される。義務教育ということだから最悪退学という事はないが、これから仕事を思えば安易に遙を家に歸す訳にはいかなかつた。

「関係なくないよ！ 知らないの？ 大隈さん、PTAの人達に問題視されてるんだよ。

ううん、それだけじゃない。このままじゃ大隈さん、学校から追い出されてこの町からも」

「それなら逆に清々するさ」

その言葉に透子は息をのんだ。冷たい聲音。何処か闇のあるいでたち。

「元々この町にはあたしの居場所なんかなかつたんだ。
それなら、退学だろうが停学だろうが痛くも痒くもないね」

その頃の遙には世間体など関係なかつた。もし自分の態度のせいで学校に居られなくなつても然程問題視する程のことではない。

遙はそう言つや透子を遮つて校舎を後にする。透子は心の何処かで歯痒さを感じながら、やがて気づいたよつに声を上げた。

「待つて！　待つてるから。私、大隈さんのこと、ずっと待つてるから……」

何でお人好しなんだ。遙は背中に投げかけられた言葉に苦笑しながらも心の何処かで何とも言えないやりきれなさを感じた。自分の居場所はない。そう決め込んで普段学校にいても然程眞面目には暮らしてこなかつた。しかし、実際は違つたのかもしれない。

自ら自分の居場所を見つけよつとしなかつた。だから居場所がなかつた。

それだけの話だ。しかし、今更それに気づいたところで後の祭りでしかない。

しかし、数日後遙にとつて驚くべき事が起つた。あれほど問題視されていたにも関わらず、遙は学校を追い出されなかつたのだ。話を聞こうと放課後、クラス委員の仕事をしていた透子を無理矢理屋上に連れて行くと透子は不思議そうに遙の顔を見つめた。

「どうしたの？　大隈さん」

「どうしたの、じゃないだろ！　なんであたし、ここに居られるん

だ……？

……いや、この際そんなことどうだつていい。アンタ、一体何したんだよ！」

遙は透子が何か根回しをしたのではないかと踏んだ。本来P.T.A.といふ人種は人の話を聞かないのが普通だ。
そんな連中を相手に、透子は何をして自分を学校に居られるよつこしてくれたか。その手間は計り知れない。

しかし、透子は相変わらず屈託のない笑みを浮かべると呆氣羅漢と言つた。

「大隈さんの居場所は既にここにある。もしかつたとしても、これから作つていくことも出来るじゃない。」

そんな簡単に”清々する”なんて言つちやダメだよ。少なくとも私は、大隈さんがいなくなつたら寂しいと思つもん」

「……アンタ」

驚いて透子を見つめる遙に透子は小さく首を横に振つた。

「私は兩富透子。呼ぶ時は透子でいいよ」

遙は今まで数多の笑顔を見てきたが、透子ほど自分の心を落ち着ける笑顔はないと思った。

つい先日まで学校に何の未練もないと自分に言い聞かせていた。そして、それが事実だと思つてた。

「……わかつた。なら、あたしのことば遙つて呼んでくれ」

「ホントに…？ わあ……ありがと、遙っ」

しかし、少なくとも透子がいれば学校も案外捨てたモノではないかもしれない。

学校が嫌いなのは変わらないけれど、そのまま学校に通うのも悪くはない。

その時から遙はそれなりに真面目に日々を過ごす事を決意した。

「それじゃ、透子。早速だけど今日一緒に帰らないか？」

「え、勿論大歓迎だよ！ ……あ、でも、クラス委員の仕事が残つてるから、少しだけ校門で待つてくれるかな？ すぐ行くから」

「ああ、いいよ。さっさと済ませといで。実はあたし、めっちゃ腹減つてんだ」

「ふふ……わかった。帰りに一緒に何か食べて帰らうね」

「透子の奢りな」

「ダメ！ 割り勘だよ、割り勘つ」

「ちえつ」

そんなこんなで透子と遙の絆は今になつても色褪せないまま残っている。

今になつてみれば立場が逆転しているような気がしないでもないが、

それは一人にとつて然程気になる」とではなかつた。

親友の変わらない笑顔。互いにとつてそれが何よりも幸せだつたらう。

「……」めんね、遙。急に電話しちゃつて

『だからもうこいつとは眞にしないの。友達でしょ?』

「……うん」

透子は涙で腫れた眼を擦ると遙の言葉に小さく笑みを漏らした。

遙は変わつた。最初の頃は取つ付き難い印象を受けていたが、今は素つ氣無さの中にも確かに優しさがある。

遙は本当に心から透子の事を心配しているのだ。だからこそ、これ以上心配はかけられないと透子は感謝を込めて微笑む。

「あらがとう。それじゃ、そろそろ切るね

『今日はゆっくり休みなよ』

「うそ、やうある

『よし。それじゃ、おやすみ

「ふふ……おやすみなさい』

プチッ。電話が切れると透子はコードレスフォンを枕元に戻し、そ

のままベッドから降りる。

そして、ふと視線が机の上の写真立てに向かい、透子は少し間を開けると、クスッと今一度笑みを漏らした。

写真は中学の頃に遥や祐斗と教室で撮ったものだった。自分の右には遙、左には祐斗がいる。

どう足掻いても過去には戻れない。だったら、多少冒険してもこれから先の未来に向かうだけだ。

同じ頃、とあるマンションの一室にも一本の電話が入っていた。小奇麗に整理されたクラシックな空間。君島祐斗の部屋だ。

しかし、こちらは相手が友人の類ではないのかあからさまに嫌そうな顔をしていた。

「それで、御用は？」

『だから、本当に悪かつたと思つてるって！　いい加減機嫌直してくれよ』

用件は今日の昼間の事だった。和人は人懐っこい性格でクラスでは誰からも好かれる人気者らしいが、だからといって今回の事を安易に許せはしない。もしそれをすれば、和人の行動を認めるようなものだ。

『あれから、俺も色々考えたんだ。オマエが両親を失つて、周りか

ら蔑まれて毎日どんな気持ちでいたか』

「…………」

どうやら和人も祐斗の過去を知っているらしい。考えてみれば当然かもしだれないが。

何せ直接美奈子と交渉をしたのは他でもない和人なのだ。そして、その書類には”和人の字で”祐斗のサインがあつた。興味本位でその中を覗いたとしても何ら不思議はないだろう。故に、祐斗も然程驚きはしなかつた。　ただし苛立つだけで。

『俺には両親もいるし、すぐそばにはいつも元気な妹や弟達もいる。どんなに考えてもオマエの苦しみを、俺は100%知ることは出来ないかもしない』

「当たり前だ」

今回の件に関して環境の違いは大きい。いくら想像で相手の事情を把握しようとしても所詮それは想像でしかない。

実際、真実を知るのは本人のみで、本人が自分から直接話す気がなければもはやこの問題は誰にも手出し出来ない。

『わかつてるつて、取り敢えず聞けよ。　でも、俺は今回の件で思い知られたんだ。

自分の軽率な行動は確実にオマエの負担になつてる。俺が許されないのも仕方ないってな』

それなりに理に適つてゐる意見だ。和人は案外物分りがいいのかもしれない。

しかし、ぐぢこよつだが、だからといって彼を許せる理由にはならない。

『だから、最悪俺は許されなくてもいい。ただな 西篠さんだけは許してやってくれねえか?』

「は?」

祐斗はいまいち事態が呑み込めずあからさまに怪訝した。

しかし、話を聞いてみると段々その言葉の背景が明確になっていく。

『彼女、あの後ずっと教室で泣いてたの、俺見ちまつたんだ』

「…………」

『確かにオマエの言う通り、彼女には自分を本気で怒ってくれる人はいなかつたかもしない。』

でも、だからこそ彼女にはオマエの態度が相当堪えてたんだ。それ程のダメージ お前にわかるか?』

わかっている。自分でも今日の自分の態度が女の子に対するものにしてはあまりにも酷だと思った。

しかし、あの場で怒りを発散しなければ今頃彼女は尚も自分のしたことの残酷さに気づかなかつただろう。

人の過去を無理矢理引き出し、拳銃それをちらつかせて自分との関係を築かせようなど正氣の性とは思えない。

そもそも、そんなことをして友達といつもの関係が本当に形成されるだろうか。当然答えはNOだろ。

「わかつてゐや」

『ん?』

「彼女に悪気がなかつたことも、俺の態度があまりに過剰すぎていたこともわかつてゐる。

でも、だからって安易に許せるものでもないんだ。」

『…………』

「過去は俺にとって戒めの鎖だ。受けた傷が大きいほど人は臆病になつてその先の未来を生きる気力がなくなる。そういう意味では彼女も俺と同じなんだろう」

今、美奈子は精神的にかなり滅入つてゐる。

そして、その傷はすぐには回復するものではない。

「かつての俺は過去を思い出すとその後の数日は、その後遺症に悩まされた。

……いつそ、自分で自分の喉をカツ切つてしまいたい気分になるよ」

息の根を自分で止めてしまえばこの苦しみからは解放される。

しかし、それは同時に生の終わりをも意味する。

ゆえにそれはそう簡単に出来るものでもなかつた。

『祐斗。』

その張り詰めた一言に祐斗は一瞬目を真ん丸くするとやがて一笑する。

「安心しろ。今は自殺願望なんかないから」

『……ならいいけど。』

自分の軽率な行動が元とはいって、このまま自殺でもされたら後味が悪すぎる。和人は本当に安心したように一つ息をついた。

『それで？ オマエ、これからどうあるんだ』

『……フツ』

『？ おい、何笑つてんだよ。祐斗』

和人は祐斗の反応に怪訝しき声のトーンがやや下がった。

祐斗は少しの間笑みを漏らすとやがて落ち着いたところで改めて口を開く。

「いや。オマエ、結衣と同じ事聞くんだなと思つて」

『は？』

「アソシも今日言つてた。『これからどうあるんですか？』って。」

『……そりゃ、オマエのことが心配だからだろ。』

そういう意味では、俺は神崎さんと同じ気持ちだぜ』

「わかつているよ。美奈子お嬢様とはいづれ機会があれば話しあう。もとも、あちら側にその気がなけりや、水掛け論で終わるだけだがな」

話し合いとは本来双方が真正面から向き合つて初めて成立する。もし片方が真剣でも、もう片方に真剣さが足りなければ話し合い足り得ない。

否。真剣さ、ではなく強いて言つなら相手を理解しようとする心意気だらうか。

『その心配はないぞ』

「ん?」

『……彼女も、オマエに謝りたいって言つてた。』

それは今日の放課後。祐斗が教会前のベンチに向かっていた時、和人はやはり美奈子が気になつて改めて階段を駆け上がつた。案の定、教室の中からは泣きじやくる声が聞こえ、覗いてみるとそこには未だ悲しみに打ちひしがれている西篠美奈子の姿があつた。

その風貌たるや財閥のお嬢様には見えない。強いていうならば、たつた一人放課後の教室で泣きじやくる”西篠美奈子”といふ名の女の子。

いくら泣いても涙は止め処なく溢れてくるようで、それが自分の言葉で止められるとは思っていない。

が、だからといってこのまま黙つて帰るわけにはいかないと和人は意を決して教室へ入つていく。

元はといえば自分の軽率な行動が引き起こした結果なのだし、和人には目の前の現実に何かしらのケジメをつけなくてはいけなかつた。

「！　あなたは……」

「こうして面と向かつて話すのは初めてだな。檜山和人。祐斗のダチだ」

本来ならば祐斗の友達を自称する資格はないのかもしれない。和人は知り合いの情報屋に頼んで祐斗の個人情報を入手したのだが、今思えば、それは限りなく愚かな行為だった。それが原因で少しづつ仲良くなつていた祐斗を怒らせ、拳句美奈子まで悲しませてしまつたのだから。

「……君島さんは？」

「帰つた。もう、学内にもいない」

「そうですか」

美奈子はその答えに目に見えて落胆し、間髪入れずに再び嗚咽を漏らした。

本当はちょうどその頃、祐斗はいつもの教会前のベンチにいたが、

それを話したところで何にもならないだらうと和人は敢えてそのことを伝えなかつた。

「……私……わたし、これからどうすればいいんでしょ……」

「え……」

「……船島さんとはもう、お話をすることないか、普通にお会いすることも……出来そうもありません」

「……」

美奈子は何処までも祐斗しか見ていない。

不純な動機がきつかけとはいえ美奈子の存在を少しづつ特別なものと認識していた和人はそれに少なからずショックを受けた。

そもそも、祐斗にあれだけの屈辱を与えてなお、彼女を想う資格はないのかもしれない。

がしかし、このまま彼女を放つておくことは和人には出来そうもなかつた。

「たしかに、君は　いや、俺達は取り返しのつかないことをしてしまったのかもしれない。

実のところ俺だって祐斗が怒る気持ちもわからなくはない」

「……辛い過去だから、忘れない過去だから……君島さんはそれを知られて傷ついた」

こくり、と和人が美奈子の感情のないその言葉に頷く。

「でも、祐斗がどれほど深い傷を負つていたとしても、それを受け止められる人がいれば、そう簡単に傷は開かない」

「！まさか……彼には今、過去の傷を話せる相手がないないとでも？　だって、あなたは彼の御学友で……」

しかし、和人は苦痛な表情のまま首を横に振る。

「本来は然程親しくも無いんだ、俺達」

「…………」

「それに……もしアイツに過去の傷を洗い浚い話せる相手がいても、そのすべてを受け止めるには並の精神力ではとても無理だ。

その上、その傷を俺が半ば無理矢理に掘り起こしちまった。結果、アイツの傷は当初の倍かそれ以上に膨れ上がってる。

目の前の現実は当然の成り行きだよ」

祐斗の心の傷。それは過去の記憶だけではなく、和人と美奈子の行動によつて今確実に深くなつていて。

こればかりはいくら結衣でも癒すことは難しいだろう。

事の深刻さを初めて知つた美奈子は思わず言葉を失つた。

温室育ちである美奈子にもやはりそれ相応の感受性があつた。現実は想いを寄せる相手を自分の手で傷つけてしまつたのだ。

「私……どうしたら……」

呆然としながら咳く美奈子。

もう、どうしていいかわからなかつた。今まで生きてきて、美奈子にはこれほど複雑な現実に直面したことはない。祐斗の言つように、何不自由なくすくすくと育つてきたのだ。だからこそ現状に立ち向かう意志を即座に持てるわけがなかつた。

「簡単だよ」

「え……？」

そうあつさりと言つてのける和人を驚いて見つめる美奈子。しかし、和人の顔には彼独特の人懐っこい笑みが浮かんでいる。

「君が誠意を持つて祐斗に謝ればいい。
勿論、俺もそうする。……一緒にアイツに謝ろう」

「……はい」

再び現在。

『へえ……オマエつて、結構マメなのな』

「茶化すなつて。俺だって本当に悪いと思つてるんだから」

和人の部屋。祐斗のマンションとは違い、二階建ての一軒家で家族で住んでいるためそれなりに広い。
机の脇には趣味でやつてているアコースティックギターがあり、よく

見ると本棚にはギタースコアが数多く納まっていた。

『わかつてゐる。これ以上ツンツンするのも嫌だし、今回の事は許してやるよ。』

「おお、祐斗大明神様！ 有難き幸せつ」

そう言って大袈裟に歡喜の声を上げる和人。

勿論本音だ。これ以上祐斗と険悪になるのは嫌だつたし、何より自分なりに彼と仲良くしたかった。

それが自分が犯してしまつた罪に対する償いだ。

そして、自分の想い人 美奈子を苦しめた自分に対する、せめてもの慈悲でもある。

『ばーか。気持ち悪いこと言つてんな』

「失敬な！ これでも俺は本気と書いてマジだぞ」

『んな、下らない弁明はいいから

和人は繰り返される祐斗の言葉にそっと胸を撫で下ろした。どうやら本当に許してくれたようだ。

「 兎に角、西篠さんとのことは俺が仲介に入つてやるから、ちゃんと許してやれよ」

『ああ、了解した。……しかし、和人。あの美奈子お嬢様の何処がそんなにいいんだ？』

祐斗の心にふと浮かんだ疑問。しかし和人は意外とあっさりとそれに答えた。

「全部。全て。英語で言つとオール」

まさに間髪入れずだ。和人の想い人が美奈子であることは先ほどの回想の説明で既に言つている。故にこれ以上黙つていることもなかつた。

『アホ、んなはつきり言つな。聞いてるこいつが恥ずかしい』

「へへっ」

苦笑する祐斗を余所に和人は本当に嬉しそうに微笑んでいた。
これで明日、美奈子と祐斗の間に生まれた亀裂が修整出来れば何も言つことはない。

しかし、そう簡単にいくだろうか。

同时刻、姫野市の中でも一際その存在感を持つある建設物。ある有名な設計士が設計したその豪邸こそが西篠財閥の本拠地 西篠邸だ。

東京ドーム一個分はあるつかという広さの敷地内に屋敷と別館室内プールなどの施設が建ち並び、明らかに常人の住む世界とは異質の空気が漂っていた。

夕刻を過ぎ、周囲が暗くなつたせいも多少はあるだろうが、元々敷地が広すぎるというのも間違いなく理由の一つとして挙げられる。何せ庭に生えている草木は一部を除きほぼ全て海外から取り寄せたものが植えられているのだ。常人の住む世界ではないのは一目瞭然である。

そんな中、一人の少女が庭の人工芝を歩きながら、そつと池の前に立ち止まつた。

フリルの沢山ついた上品なドレス風の寝間着を着ている美奈子だつた。しかし、その視点は何処を見る訳でもなく宙を漂つてゐる。

美奈子は今、ある日の回想に浸つていた。

今年の四月 私立姫野学園の入学式の日、美奈子は同級生の中に自分と同い年とは思えないほど大人びた少年の姿を見つけた。少年は何処か鬱陶しそうに周囲の何処にも視点を合わせず何となしに宙を見つめ、かと思えば制服のポケットに手を突っ込みながらそのまま何処かへ行つてしまつた。

美奈子は初めて見た時から少年のミステリアスな雰囲気に惹かれ、何度も声をかけようとしたが箱入り娘の彼女にそんな勇気があるはずもなく、日々は刻々と過ぎていく。

今日のような夜を重ねる度、脳裏に浮かぶ少年の暗い瞳が美奈子には何処か艶かしく感じられ、それがたまらなく心地良かつた。

今思えば、今までずっと屋敷に籠りがちだった美奈子にとつて、それが”遅すぎる初恋”だったのかもしれない。

そつと自分の胸を抱く美奈子。すると、胸に確かに感じる痛み。や

がて耐えられなくなつてふとその場にしゃがみ込む。

「……う……く……っ」

辛い。今まで約16年間生きてきて感じたことのない圧迫感に、美奈子は必死になつて耐えていた。
元はといえば自分の軽率な行動から起つた事だ。今更逃げられるものでも、まして無かつた事にすることも出来ない。

密かに好意を寄せる相手の情報 美奈子が和人を通じて入手した君島祐斗の暗く閉ざされた過去。
彼の瞳に浮かぶ闇が発生したまさにその瞬間をも垣間見ることが出来る細かな個人データ。

実のところ、それを入手したいと思つたのは必ずしも彼女の意思という訳ではない。

ある日、自宅の庭でいつになくボーッとしていた美奈子を、
彼女の父親である西篠禎治氏せいしゆ せだるが声を掛けた。

最初はもたついて理由を言い出せなかつた美奈子だが、
このままだボーッとしても仕方がないと勇気を出して事の経緯を告げた。

高校の入学式当時から気になる異性が出来たこと。
そして、日を重ねる毎にその少年の顔ばかり脳裏に浮かべてしまつてゐること。

禎治は最初怪訝そうにしていたが、やがて何かを閃いたのか意味あ

りげに口元に笑みを浮かべ、美奈子にこんな言葉を投げかけた。

『ならば、彼の個人情報を入手すればいいのではないか？
されば悩みも少しは晴れよう。私に任せておきなさい』

結果として、その言葉が美奈子暴走の引き金となってしまったわけ
だが。

何故和人に情報リーアクの矛先が向いたかといえば、西篠財閥の現当
主である禎治は立場上姫野市内の住民情報に少し通じており、例え
ばある人物を探したいという依頼があれば今、市内の何処に住んで
いるかまたその場所には今何人で住んでいるのか等、短時間であら
ゆる情報を得る事が出来、檜山和人はその中でも美奈子と同学年で
あるし、知り合いに裏業界でそこそこの名のある情報屋がいることも
わかつっていたからだつた。

個人情報の売買はお世辞にも良い商売とは言い難いが、学園内でそ
れらを誰にも見られずに受け取る時間は十分あるだろう。

実際、美奈子は和人から君島祐斗の個人データを誰にも見られる事
なく入手した。

そして、数日が経ち、過去をちらつかせることで祐斗の近い存在に
なることを望んだ。

しかし、ハタから見れば非常識で失礼極まりない事と知らずに美奈
子はそれに気づかない。

というより、気づける材料がないと形容した方がよりしつくりくる
だろうか。繰り返すが彼女は折り紙付きの箱入り娘だ。

もし好きな人が出来ても声をかける勇気さえなく、かといって遠くから彼の姿を見守っているだけではあまりに辛すぎる。

もつとも、このような結果になるくらいならそうした方が幾分ラクだつたかもしぬが、彼女にそれを自覚出来るだけの経験はない。

それならいっそ、彼自身の情報を手に入れてそれで彼の事を知った上で、”御学友”という形で祐斗とお付き合いを始めたかった。

それが美奈子の本音だ。しかし、現状はあまりにも複雑で、彼女は今になつて自分の躰を蝕む”何か”の存在に気がついた。

その”何か”さえなければ、美奈子は明日勇気を出して迷わず祐斗に謝罪が出来たかもしない。

しかし、その”何か”を生み出したのは間違いなく軽率な美奈子自身の行動であるのも確かだつた。

逃げられない現実。いくら時間を重ねて、いくら無い頭をフル回転させても現状は一向に覆せるレベルにはならない。

次第に生まれる焦り。悲しみ。虚無感。美奈子はそんな感情を胸に秘めたまま、今夜の庭を佇んでいたのだった。

明けて金曜日。姫野学園は些か騒がしかつた。来月の十一月四日には秋の学園祭を控えており、今日は授業が終わるとその準備に大新波だつた。

学園祭は毎年各学年・各クラスでそれぞれ思考を凝らした出し物を用意し、外来にも十分喜ばれるような雰囲気作りを心掛けており、今年は学園の敷地内に様々な出店を並べたり、教会の前で吹奏楽部

がクラシックを演奏したりすることが既に決まっていた。

一年A組。黒板に白いチョークで”小物屋”だの”仮装行列”だの色々と候補が挙げられている中でただ一つ、マル印がついている項目があつた。￥”喫茶店”。どうやらそれが今年の出し物のようだ。

「おいおい、よりもよつて接客かよ、だりいな」

ふと祐斗の後ろの席で聞きなれた声が響いた。振り向く間もなく祐斗は皮肉を浴びせる。

「……んなこと言つて本番サボるなよ、和人」

「つるへー」

今まで気づかなかつたが、驚いたことに祐斗の後ろの席は和人だつた。

普段然程周囲を意識したことも無かつたが、いざこづして見ると妙な感じを覚える。

祐斗は高校入学以来、一度たりとも人の存在をこんなに近く感じたことはなかつた。

それは、中学時代はそばに透子がいたかもしれないが、今年に限つて言えば和人の存在は大きい。

つい昨日、電話で話した事も少なからず影響しているだろうが、何より彼は性格上、何処か憎めない。

人懐っこい少年のような笑みは典型的な楽天家を意味し、時折見せ

るぶつきらぼうだが暖かな言動は彼の人柄を表す。

祐斗は和人と小一時間しか話していなかつたにも関わらず彼に気を許した数日前の自身を思い返し、その理由がやつと府に落ちた。

出会いが最悪なだけに最初は然程氣にしていなかつたが、檜山和人の天性の樂天主義と仁徳溢れる行動はまさに称賛。

それは、彼も人間故にかつたるいと思う事もあるだろう。しかし、だからといって普段の彼の人柄を無に返せるものではない。

「 それでは、今決めた役割分担に基いて各自が各自の力を最大限に發揮出来るよう、事に邁進せられたり。以上だ」

教壇に立つ男子生徒はその独特の硬い口調を崩さず、クラス委員といつ立場からはつきりとクラス中にその声を響かせた。

一年A組のクラス委員 渋谷英一しぶや えいじは責任感の強い生徒でその頑な態度は教師には好評だった。

もつとも、生徒からすれば彼の態度は普段から何処か偉そうで鼻につく。 所謂、典型的な嫌われ者の性格なのだ。

「 にしても、相変わらずうちの教授は凜々しい」と

祐斗はあくまで口の中で呴くように言った。祐斗は教授 つまり、英一が嫌いだつた。

と、かなり小さい声で言つたにも関わらず、何処からか笑い声のようなものが聞こえてきた。

「ふふ、言えますね。噂じゃ今回の学園祭、生徒会の代表で学年全体を彼が取り仕切るらしいですよ」

「く……？」

不意に和人ではない声が耳に響いて、祐斗は素つ頓狂な声を上げてしまつた。声の主は隣の席にいた優しい顔立ちの少年だつた。

「……えつと……」

「はあ……どうやら、檜山君と同様、僕の顔と名前の方も一致していなさいょうですね」

如何にもわからなそうに眉をひそめていた祐斗に少年が困り顔で苦笑する。

「そう。一見して美少年であることはわかる。しかし、肝心の名前がどうしても思い出せない。」

入学から半年以上立つている時期にも関わらずだ。考えてみれば祐斗はかなり薄情者である。

「いいですよ。あなたのそういうところは今に始まつたことではありますんし……何より僕は、比較的心が広い方なのでねっ」

少年は再び微笑むと、祐斗にワインクを送つた。些か今の年齢には似つかわしくない大人びた仕草。相手が女子なら思わずドキッとしてしまうところだ。

「……変わった奴だな、おまえ」

「む、随分な物言いですね。ま、いいです」

少し膨れたようだが、すぐに表情を戻し少年はおもむろに名乗り始めた。

「僕は皇紘大。すめらぎ こうだいあなたがさつき言つていた教授は僕の幼馴染みです
よ」

「え？」

その言葉に祐斗はもう一度教壇に立つ英一を凝視する。

彼は相変わらず頑なな表情を変えず、雑務を淡々とこなしていた。

あの”堅物クン”の目の前の”優男”が幼馴染み。この、全く正反対の性格をしている彼らが、俄かには信じ難い事実だつた。しかし、目の前の美少年 鉢大は相変わらず好意的な笑みを絶やすず、如何にも祐斗の反応を楽しそうに見つめていた。

「……なんだよ」

「いいえ？ 何でもありませんよ」

「……」

へんなやつ、それが祐斗の鉢大に対する第一印象だった。

今まで自分をここまであからさまに楽しそうに眺める人間を彼は見た事がない。

中学時代の透子は まあ、別の意味で微笑みを絶やさない少女だつたが、

彼女と鉢大とでは全く別の人種であることは火を見るよりも明らかだろう。

彼女の場合は祐斗に対する好意が含まれていたが、目の前の美少年の瞳は明らかに違う。

もつとも、男同士で好意を持たれても困るが、何よりその笑みは意図が掴めない。

一見すれば、楽しそう、嬉しそう、という形容も強ち間違つてはないが、

明らかにそれとは違う念も込められているのは明白だった。

やがて、一通り学園祭の準備に区切りがつき、祐斗は和人と共に学園の校門で帰路に発とうとしていた。

しかし、一見して二人は仲の良い友人同士に見えるが、その顔は何故か優れない。

その理由は何より数メートル離れた少女の存在にあった。

胸辺りまであるロングヘアは生まれつきウェーブがかかり、少女は姫野学園指定の制服を上品に着こなしている。

美奈子である。一通りの準備が終わった後、和人が彼女のクラスへ行つて態々連れてきたのだ。目的は勿論　　つい先日の謝罪。

しかし、謝罪と言つても何から話せばいいかわからず、暫し三人の間に重苦しい静寂が訪れた。やがて、その沈黙を破るように誰かが一つ溜息をつく

「おい……」そのままボ～ツとしていいのか？」

祐斗だった。その一言に美奈子の躰が少し震える。

「…………すみません。で、では……まず謝らせてください。
この度は、一個人の判断で勝手なことをしてしまい、誠に申し訳ありませんでした。

あなたの気持ちを考えることも出来ず今に至ること……本当に、申し訳御座いません」

祐斗の言葉に促されるようにして美奈子が頭を下げる。彼がそれを意図して声をあげたのか、と和人は思わず祐斗を凝視した。
視線の先の祐斗は相変わらず無表情のまま視線は美奈子に向けている。見る人から見れば怒っているとも感じられるかもしれない。

と、やがて祐斗はフッと笑みを零し、首を横に振った。

「え……」

きょとん、とする美奈子。それを見て、和人が大袈裟に肩を竦めた。

「たしかに今回、君の行動は度が過ぎていた。
正直、過去を引き出されてあまりいい気分はしなかったよ」

「祐斗。」

「まあ待て」

何か言いたそうな和人を制し、祐斗は美奈子に向き直る。

「前に俺は言つたな。『人の過去は本人ですら時間をかけて蓋をしてしまいたいものも存在する』と」

「……はい」

勿論、美奈子もその時の事は覚えている。といつより、忘れられないと言つた方が幾分適切だろうか。

何故なら、それを言つた時の祐斗の顔は忘れてくてもそう簡単に忘れられるものではないのだから。

憤怒、嫌悪　そして、微かな悲しみを湛えた祐斗の表情。それを思い出すだけで美奈子の心はチクリと痛む。

しかし、今日の前の現実から田をそらしてはいけない。それをしたなら、どんなに言葉を並べても謝罪にはならないからだ。

美奈子は極力祐斗から意識をそらさないようにしながらも、その躰は小刻みに震えていた。

和人は一瞬、その肩を支えてやりたい衝動に駆られたが、もはやそれすら許されない。

こうしてしまったのは美奈子の軽率な行動と、およそ和人らしからぬ無慈悲な行動の結果。

心臓を貫くような鋭い痛みが和人の胸に突き刺さる。もはや、まともに美奈子の顔さえ見れない。

「……俺の過去はその典型的な例、とだけ言つておく。

例え相手が親しい人でも、今後一切このような真似はするな。
それが約束出来るなら、これ以上君を咎めることはしない」

祐斗は真っ直ぐに美奈子を見つめた。美奈子もほぼ泣き顔とも形容出来る顔ながら、真っ直ぐ祐斗を見る。

「お約束します。もう一度と、このような醜態を晒すことません。

もしそのようなことに再びなったとしたら、私は如何なる贖罪をも受けれる覚悟です」「

醜態。強ち間違つてはいないが、傍目典型的なお嬢様である美奈子からは到底浮かんでこない言葉だ。

祐斗はその美奈子の真っ直ぐな瞳を捉えながら、やがてコクリと頭を縦に振つた。その刹那、一つ溜息が漏れる。

「……これで、取り敢えず一件落着、か?」

「そうだな。彼女も反省しているようだし、俺もこれ以上腹を立てたくない」

その言葉に和人が再び溜息まじりに頷く。

「よつしや。んじや、景気祝いにどつか寄り道して行かねえか?
勿論、西篠さんも一緒に」

「えつ……?」

驚いて和人を見つめる美奈子。

如何にも「いいんですか?」と言いたげだった。
その視線を感じて振り向くと和人は一笑した。

「なつ、それくらいいいだろ、祐斗? もう彼女は俺達と同じ学友同士だ。

まあ、ちょつち遠回りしたが、これで俺の望みも達成されたって

訳だな

「？」

如何にもわからなそうな美奈子を余所に祐斗は和人に向かつて小さく溜息をつく。

「結局それか……なんて現金なやつだ」

「失敬なつ！ 忍耐力がある、と言つてくれ」

「冗談。ただ”がめつい”だけのくせに」

「ぐつ……かはつ！ 効いた。今のは事実なだけに無駄に効力が高いぞ、祐斗！」

「否定しないんだな。やっぱり俺、お前との付き合い考え直そくな」

「うつ……そ、それだけはやめてくれ！」

折角またこうして一緒に歩けるようになつたのに

くくつ、と泣いてみせる和人。その肩に祐斗は手を回し、宥める。

「はいはい。そんな」とぱぢりでもいいから、早く行こうな

そうしてそんな軽口を叩きながら、祐斗と和人は校門を出て行く。そんな中、見慣れぬ目の前の状況にきょとんとしてそれを見つめている美奈子。

「あ、待つてくださいっ！」

やがて美奈子は気づいたように一人の背中を追うと、心持ち若干の緊張を示しながら手に持つている鞄を両手で持ち直す。

幸いそこには、先ほどまでの悲しみと苦しみに満ちた表情はない。ともあれ、この件は一件落着したのだった。

それから連日、祐斗は和人と共に美奈子を引き連れて街に出て遊んだ。

最初は緊張していた美奈子も段々打ち解け、今や完全に場に馴染んでいる。

いつもは近寄り難い財閥のお嬢様。その実態はあまりに素朴で、その上可憐でもあった。

小さい頃から箱入り娘だったが故の世間知らずな一面。

電車やバスの乗り方も口クにわからず、その度に和人が彼女の世話を焼いた。

もつとも、和人はそのお陰で彼女との接触が増えて大喜びだったが。

そつして時は流れ、翌日のお放課後。

祐斗は久方ぶりに敷地内の教会前へ足を運ぶ。

案の定そこには見慣れた先客の姿があった。

「よつ、久し振りだな

「祐斗さん…………はい、お久し振りです」

結衣は祐斗の言葉に反応こそするが、しかし依然としてその顔は優れない。怪訝する祐斗。やがて、彼は結衣が座っているベンチとは別のベンチに座るとおもむろに口を開いた。

「元気……ないな。」

「…………」

何も答えない結衣。ずっと会いたかった彼に会えたはずなのに、そこにはかつての明るさはない。

「……先日、祐斗さんのご両親のお話を訊いてから、色々考えていました」

「えつ？」

祐斗が振り向くといつも以上の優しさを宿して、結衣は再び口を開いた。

「実は私、父を交通事故で亡くしてしまったんです」

「…」

「……」

結衣にとつて辛いはずの過去。それをさも簡単に言つてのける彼女に祐斗は驚きを隠せなかつた。

祐斗ですら結衣に自分の過去を話す時、少し躊躇いがあつたのに今の彼女にはそれが全く感じられない。

「結衣……おまえ」

「心配なさらないでくださいね……私は、大丈夫ですから。あなたに私の過去を訊いて貰いたい。今はその事しか頭にありません」

「……」

絶えず小さく微笑みながら、やがて意を決して結衣は話の続きを口にする。

「……父がこの世を去ったのは、私がまだ幼稚園の年少さんの頃です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3688a/>

不協和音

2010年10月9日03時04分発行